Ⅶ　ふくしと防災

１．はじめに

２０１１年（平成２３年）３月１１日１４時４６分宮城県沖を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生しました。この地震により、場所によっては波の高さが１０メートル以上の巨大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に大きな被害をもたらし、「東日本大震災」とよばれるようになりました。

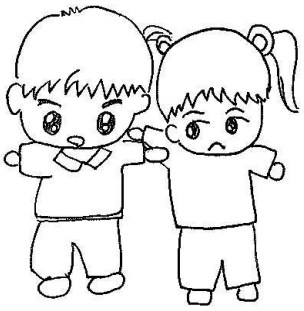
この災害では、みなさんと同じ小学生や中学生も犠牲となり、多くの大切な命がうばわれました。先ほどまで一緒に遊んでいた友だちの命が、一瞬のうちに奪われる・・・そのような想像もつかないことが、現実に起こってしまいました。

大きな災害は、かけがえのない大切な命をうばう危険をもっています。

２．災害から命を守る

災害が起きた時、まず行わなければならないことは「自分たちの命は自分たちで守る」ことです。

このためには日常的に準備しておくことは何だと思いますか。



★自分の命を守る方法は？　自分が避難する場所はどこだろう？　避難する場所に行く道を知っている？その道は安全？　家族との連絡はどのようにする？

３．絆づくりで、災害に強いまちづくり

災害が起きたとき、それぞれの命を守るためには、近くに住んでいる人同士の助け合い、逃げるときに他の人への声かけをすることがとても大切になります。

みなさんは、自分が住んでいる地域のどこに誰がいるのか、またこのハンドブックで今まで学んできたような障がいがある人、お年寄りが、身近な地域でどのような生活をしているか、どれだけ知っていますか。

性別や年れい、障がいに関係なく、同じ地域で生活している人同士がお互い知り合える、ふだんからの絆づくりが、災害のとき、一人ひとりの命を守る大きな力になります。

まちで出会ったら、自分からあいさつをしたり、地域の行事などに積極的に家族や友達と一緒に参加して、ふだんのくらしの中から、顔見知りの関係を作っていきましょう。

☆災害に強いまちづくりには、
日頃の太く強い絆づくりが大切です。

４．もし災害が起こったら？　～みんなで考えてみよう～

地震や津波、台風のような大きな自然災害は、その地域に住んでいる障がいがある人、ない人すべての人々におそいかかってきます。

このハンドブックを通して、私たちの住む知多南部３町で生活している障がいがある人の日頃の様子を少し知ることができました。では、例えば大きな災害がこの地域で起きたとき、障がいがある人はどのようなことで困るでしょうか。また、災害の種類や発生した時間によっても、何か違いはあるでしょうか。みんなで考えてみましょう。

Ⅰ　肢体不自由

Ⅱ　視覚障がい

Ⅲ　聴覚障がい

Ⅳ　知的障がい・発達障がい

Ⅴ　精神障がい

Ⅵ　お年寄り

【コラム】　災害ボランティアセンターの立ち上げ

災害で被害にあわれた人々を素早く確実に支援していくために、また、支援のために駆けつけてくれたボランティアと被害にあわれた人たちをつなぐために災害時には「災害ボランティアセンター」が設置されます。日頃から、そのしくみについて、学んでおくことも大切ですね。

５．被災地からのメッセージ

平成２３年に発生した東日本大震災の時、大津波におそわれた岩手県南部の大船渡市で生活していた２人の障がいがある方から、当時の様子とメッセージをいただきました。じっくりと読んでみてください。

そして、家族と、友達と、先生と、クラス全体で、読んだ感想を話し合ったり、気づいたことなどを発表し合ったりしてみましょう。

その日私はいつもと変わらず仕事をしていました。突然遠くの方から地ひびきのような地鳴りのような音が近づいてきて激しい揺れを感じあわてました。周りには誰もいなくて、箱が散らばり、物が落下している音が聞こえました。その後、落ちた物をかき分けながら職場のリーダーが来てくれました。何百キロの重さの加工機械が左右に動く中、リーダーは私を車いすに乗せいっしょに避難を始めてくれました。道の信号機は止まり、また我先に車で避難しようとした人々でパニックじょうたいでした。私と数人の残った人たちは車のすき間をぬって高台へと避難しました。数十分して、海の波（水）が、遠くから真っ白な砂煙を巻き上げながら近づいて来るのが見え、次の瞬間、ものすごいがれきの山とともに大津波が、避難してきた道をうめつくしていきました。消防団員がさらに高いところに上がるようさけんでいました。その後数人の方々の手を借りながら、さらに高いところへと避難しました。小雪の舞う寒い日で、どこをどう避難したのか覚えがないのですが、私の車いすを押して避難してくれた仲間はみな無事で、安心しました。

震災後は仲間の方の家でお世話になりました。私を救ってくださった見ず知らずの方々やお世話くださった方々に感しゃします。

これだけは伝えておきたい事と言えば、災害は必ずあるということです。災害以前から危険と分かっている物（例えば、大船渡では海に浮かせてあった丸太等。津波と一緒に勢いよく流れてきた。）は、できるだけ早く取りのぞくなどのそなえをしておくことで、被害を少なくできるのです。もう一つ、私は車いすをそなえていた事が、早く逃げるのに役立ちました。“備えあれば憂いなし”は全くその通りだと思います。

（ 40代 男性 岩手県大船渡市在住　肢体不自由者 ）

あの日私は仕事中でした。突然の大きくひびきわたる音と激しい揺れがあり、その後に巨大な津波が押し寄せました。震災でバスや鉄道はまったく動かず、電話も通じずタクシーも呼べませんでした。このことは、車の免許が取れない視覚障がい者にとって、移動手段を失うことになります。自宅にもどったのは１２日後、訪問かんごの車に乗せてもらいました。

その後、仕事にも行けず、買い出しや水くみ、風呂にも入れない、日常生活がまともにおくれない日々が続きました。バスが動き始めるまでの一ヶ月、また水道が通じるまでの間、親せきや周りの人たちに手伝ってもらいました。

職場でも環境が変わり、私にとって大変きびしくなりました。なれたところなら、たとえ見えなくても記おくとかんで動くことができるのですが、それもままならない。だんだん具合が悪くなってきました。

今回の震災をきっかけに、障がい者専用の避難所が必要ではないかと、またこのような時でも困らない移動手段の確保も必要ではないか、と身にしみて感じました。

最後に全国のみなさんからたくさんの支援をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。全国からかけつけてくれること（特に阪神大震災を経験した神戸から）、「だいじょうぶですか」と声をかけてくれること。それがありがたいのです。もし、大災害が発生した場合、わたしたちも視覚障がい者の支援のためかけつける心の準備は出来ています。巨大地震は必ず来る。そういう心がまえが大切ではないでしょうか。

（ 30代 男性 岩手県大船渡市在住　視覚障がい者 ）